

基調講演

演題 「砂場から見る子どもの成長・発達と保育の課題」

講師 同志社女子大学現代社会学部

現代こども学科 教授 笠間 浩幸 先生



砂場では乳幼児のさまざまな発育・発達の姿をみることができる。「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」という本があるが、まさにその通りである。今回の研修のテーマは、「たかが砂場、ありふれた保育環境、されど砂場、砂遊び」として、その可能性を、新たな切り口、視点から考えてみる。

最初に、『乳幼児期の砂遊び』のDVDを視聴しながら砂場で育つ子どもの成長の姿を捉えてみた。0歳児に初めての砂遊びを体験させる。この時期は劇的な発達が見られる。まずじっくり砂場を見ることからはじめ、そのうち、触覚、視覚、深部感覚が育ち砂の上で身体のバランスがとれるようになってくる。1歳児になると『砂場で遊ばない砂遊び』が始まる。これは、「もの」の操作を楽しむ遊びである。スコップを持って遊ぶようになってくるが、スコップを上から持つのか、下から持つのかことでどちらがすくいやすいかを体験する。この時期は、先生がすることをよく見ている。先生が砂を入れたカップをひっくりかえして型抜きあそびを見せると、子どもはどのようにしたら先生と同じようにできるか試行錯誤を繰り返し、自分でできるようになってくる。幼児期になると『砂で遊ぶ砂遊び』に成長する。子どもの身体が直接砂に触れることが増えてくる。典型的な遊びとしては、泥団子作りである。砂と水のほどよい調合を図って砂の固まりを作る。失敗を繰り返しながら何度も挑戦をし、手のひらで丸めながら、乾いた砂をかけて壊れない団子を作り始める。また、トンネルづくりも同様である。子どもの行為として、握る、かき混ぜる、山を作る、泥団子を作るなどがある。ここで、スコップを握る行動は、鉛筆の持ち方につながる。また、文字を書く時の力の加減が自然に身についてくる。2歳後半～3歳児になるとイメージと言葉が広がる遊びへと成長してくる。砂を何かに見立てたごっこ遊びが始まる。砂を使って、子どもたちは自分のイメージを膨らませ、さまざまな言葉を用いて表現をしようと友だちに声をかけたりする。年齢が進むにつれて、遊びは広がってくる。また、仲間とイメージを共有しながら

ら砂の制作をするようになり、作った作品を友達同士で評価し、また次の制作に取り掛かるということを繰り返していく。この中で、友達と協力することや達成感を味わうことができる。

このように、砂場には、沢山の発達の要素がある。 感覚 情緒 身体運動 物の操作 言葉 社会性 想像と創造 認知 科学的態度 自己。子どもたちがどのような発達の姿に向かっているのかを意識することで、子どもの砂あそびの姿は違ってみえてくる。

最後に、砂遊びには、発育発達の可能性が沢山詰まっている。子どもたちが楽しみと喜びを増大させるものであるなら、これ以上効果的な保育・教育・子育て環境はない。今、改めて身近な遊びに目を向けその必要性和重要性を理解しなければならない。

先生から砂場について沢山のことを学ばせていただきました。どこの幼稚園でも子どもたちは喜んで砂遊びをしていると思いますが、ただ楽しいだけではなく、子どもの成長に関わるたくさんの要素が含まれていることを常に心に刻んでおかなければならないと思いました。これからは、砂場で育つことを考えながら、子どもの姿を把握したり言葉がけを行っていこうと思います。ありがとうございました。

報告者 (公財) 広島県私立幼稚園連盟広報委員 石川裕子 (聖慈幼稚園)

